

# バングラデシュの仏教遺跡

—特に塔を中心として—

乾 仁 志

## I. はじめに

バングラデシュにはかなり多くの仏教遺跡がある。その主要なものは、はやく前世紀から発掘がすすめられてきたが、現在なお未発掘のものもかなりあるといわれている。今回、高野山大学が実施したバングラデシュでの密教学術調査では、とくに現地博物館に保存されている仏像を中心とする仏教遺品の調査に主要な目的があったが、その一方で仏教遺跡についてもわずかながら視察する機会をもった。バングラデシュの仏教遺跡については、わが国では大阪大学インド・東南アジア研究センターが昭和40年に実施した現地調査に基づいて、すでに村主恵快氏によって紹介されている<sup>(1)</sup>。しかしそれ以後とくに目立った報告はない。そこで今回われわれが視察した仏教遺跡についてその概要を以下に報告しておきたい。今回視察した仏教遺跡は次の箇所である。

### a) Paharpur 遺跡 (Rajshahi 地区、Mahasthan の西北方)

・ Somapura 寺

### b) Mainamati 遺跡群 (Chittagong 地区、Comilla の西方)

・ Salban Vihāra

・ Itakhola Mura

・ Rupban Mura

・ Mainamati Palace,

### c) Mahasthan 遺跡群 (Rajshahi 地区、Bogra の北方)

・ Vasu Vihāra

バングラデシュに残る仏教遺跡全体から見れば、これらはまだ一部分にすぎないかもしれない。しかしすでに村主氏の報告にあるように、いずれもバングラデシュの仏教遺跡としては代表的なもので、最重要地にあげられている。

## II. バングラデシュの仏教遺跡

バングラデシュは、もとインドのベンガル地方の東側に属し、西暦8世紀から12世紀にかけて、一時はベンガル、ビハールを中心に東インド地方一帯を支配したパーラ(Pāla)朝の本拠地として知られている。パーラ朝の歴代の諸王は、多くの仏教寺院を建立するなどしてあつく仏教を保護したが、とくに以下の寺院が有名である<sup>(2)</sup>。

1) Odantapura 寺(初代 Gopāla 王)

未発掘 インド Bihar 州、Bihar Sharif

2) Vikramaśīla 寺(2代目 Dharmapāla 王)

インド Bihar 州、Bhagarpur、Antichak

3) Somapura 寺(3代目 Devapāla 王、或いは Dharmapāla 王)

バングラデシュ Rajshahi 地区、Paharpur

4) Jagaddala 寺(Rāmapāla 王、11c 後半~12c 前半)

未発掘 バングラデシュ Rajshahi 地区、Dinajpur Dis.、Jagaddal

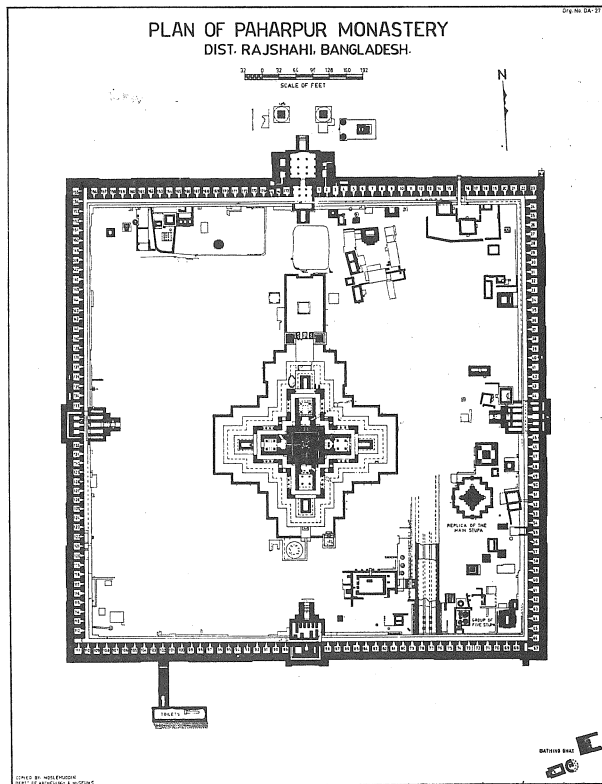
ところで、これら四大寺院の中で、すでに発掘が行われ、その遺構の全容が明らかになっているヴィクラマシーラ<sup>(3)</sup>とソーマプラの両寺は、ほぼ同規模、同様式の遺構を有しており、単独の仏教建造物としてはインド亜大陸において最も規模の大きいものであって、パーラ朝時代を代表するものと見なされる。この両寺に見られる特色として、内庭中央に十字形プランの塔を有する点があげられる。この十字形塔は、バングラデシュの他の仏教遺跡にもあり、とくにパーラ朝時代の代表的な塔様式であると考えられる。そこでバングラデシュの仏教遺跡について、とくに十字形塔を中心に紹介したい。

### a) パハルプル遺跡

ソーマプラ寺跡のある北ベンガル地方は、パーラ朝時代にはヴァレンドリー(Varendri)あるいはヴァレンドラ(Varendra)地方と呼ばれていたところで、8世紀半ばに興ったパーラ朝の故地として知られている<sup>(4)</sup>。ソーマプラ寺跡【図1】は現在ラジシャヒ地区(Rajshahi Division)のジャイプルハット(Jaipurhat)の近郊にあり、ボーグラ(Bogra)の北方マハスタン(Mahasthan)から北西43km(29mile)ほどのところに位置する。そこは現在パハルプル(Paharpur)と呼ばれているところである。このパハルプルにある遺跡から出土したテラコッタ印章銘文によって、この辺りが往時にはソーマプラ(Somapura)と呼ばれ、その遺構がダルマパーラヴィハーラ(Dharmapāla Vihāra)と呼ばれていた僧院の跡であったことが知られた<sup>(5)</sup>。ダルマパーラはヴィクラマシーラ寺を建立したパーラ朝の2代目の王である。ただしターラナータヤスンパケンボなどによるチベット仏教の伝承との関係から、このソーマプラ寺の建立者を3代目のデーヴァパ



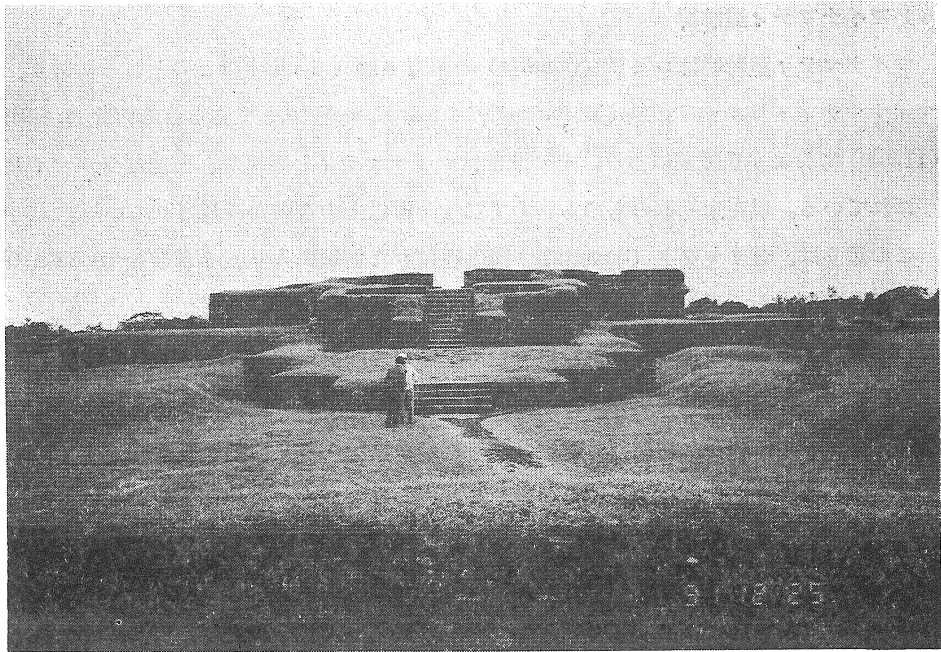
〔図1〕 ソーマプラ寺の中央高塔の東面



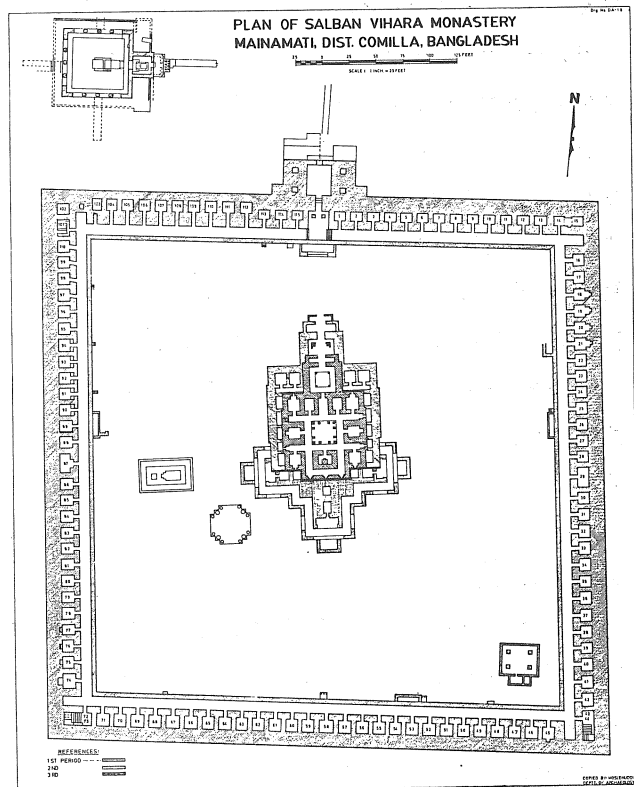
〔図2〕  
ソーマプラ寺のプラン

ーラ王とする説が一般的である。<sup>(6)</sup>

さて、ソーマプラ寺跡に見られる基本プラン【図2】は、内庭中央に十字形の巨大な塔を配し、その周囲を小室の列が廻廊状に取り囲み、正方形になっているのを特徴としている。中央の塔は全体から言えば三層形式で、複雑な突出をもった二重のテラスの上に塔身の本体部分にあたる第三テラスが配されている。地面に接する第一テラスの側面周囲には方形のテラコッタが横一列に整然と嵌め込まれている。また現在は土中に埋もれて見ることはできないが、さらにその下部には龕室があり、六十三体の石像が確認されている。その中、南面中央部にあるパドマパーニを除いて大半はヒンドゥー教の諸神である。その上にある第二テラスの側面周囲には横二列に整然とテラコッタが配され、それを巡るように第一テラスの上に繞道がある。第三テラスにあたる塔身は正方形で、しかも、その四方にそれぞれ突出した祠堂が接し、その祠堂の前には比較的広い前室がある。その前室にはそれぞれ四ヶ所に列柱の礎石が残っている。また四方の祠堂を巡るように第二テラスの上にも繞道が配されている。なおこの第三テラスの塔身の中央には四角い空洞が貫かれているが、そこへの出入り口はない。この三層の塔の現在の高さは21m (70ft) あるといわれ、またその平面の大きさは東西、南北ともに100m (東南356ft、東西314ft) ほどある。ただし、北側の第一テラスの突出部分は他の三方より長い。これはこの僧院が北門形式であることによってしている。周囲を取り巻く小室の列は整然と連結され、廻廊を通じて結ばれている。小室の数は各四方の中央区域を除いて177室にのぼり、外周の広さは南北が276.6m (922ft)、東西が275.7m (919ft)、あるいは東西、南北ともに246.6m (822ft) あるといわれている。また各小室には大抵仏像を安置する基壇があったといわれているが、現在は北東部の小室群に一部残っているにすぎない。各四方の小室の列の中央には門らしき跡がある。ただし実際に正式の門として見なされるのは北門のみである。東門には出入り口があったようであるが、それらはソーマプラ寺跡の東側360m (400yd)、あるいは270m (300yd) ほどのところで発掘されたサティヤピルビタ (Satyapir Bhita)<sup>(7)</sup> へ行くために、便宜的につくられた私的なものであったろうと見なされている。東南西の三門にはそれぞれ三室があり、この三室を巡って外側ぞいに通路が存在する。これら三門は全く同じ様式で、西南の二門には出入り口はない。なお僧院内への出入り口は、その他に北側小室列の東部にもある。これは裏門に相当し勝手口として使用されていたものと見なされている。その他、付属施設などについては省略するが、東側内庭に中央の塔の雛形として中規模の十字形塔の基壇跡が確認されていることを付言しておく。<sup>(8)</sup>



〔図3〕サルバンヴィハーラの中央主堂の北面



〔図4〕サルバンヴィハーラのプラン

## b) マイナマティ遺跡群

マイナマティ遺跡群はコミラ (Comilla) の西方 8 km (5 mile) ほどのところにあり、マイナマティ・ラルマイ領域 (Mainamati-Lalmai Range) として知られる南北 17, 18 km (11 mile) におよぶ丘陵部にある。その北部はマイナマティと呼ばれ、南部はラルマイと呼ばれている。現在未発掘のものも含めて二十ヶ所以上の遺跡が確認されている。

この辺りは、昔サマタタ (Samatata) 国と呼ばれた地域に入り、7世紀後半にはこの丘陵部の西側にある現在バドカンタ (Badkanta) と呼ばれているところを中心にカドガ (Khadga) 朝が存在したと言われている。僧哲禪師がこの地を訪れた時には、玄奘三蔵以後半世紀ほどの間に仏教がかなり盛んになっていたことが伝えられている。その後、北ベンガルに興った初期パーラ朝と同時代の8世紀から9世紀ころには、マイナマティを中心にデーヴァ (Deva) 朝が存在したといわれている。また10世紀から11世紀にかけて、この地方はチャンドラ (Chandra) 朝に属し、その後にはパッケイテラ (Pattikera) 国がこの地に存在したといわれている。

マイナマティ遺跡群の中で、とくに有名なのはサルバンヴィハーラ (Salban Vihāra) 【図3】である。サルバンヴィハーラは、ここから出土したテラコッタ印章銘文から、古くはババデーヴァヴィハーラ (Bhavadeva Vihāra) と呼ばれていたことが知られる。<sup>(9)</sup> ババデーヴァはデーヴァ朝の4代目の王といわれている。サルバンヴィハーラ【図4】はヴィクラマシーラやソーマプラの両寺と同様のプランを有し、内庭中央の主堂の周囲を小室の列が廻廊状に取り囲み正方形になっている。中央の主堂は三回にわたって改修され、四期の時代層のあることが確認されている。その初期の建築様式は十字形で、その後、塔の北面が増設されて全体がたて長の祠堂形式に模様替えされた。現在もその初期の十字形の痕跡を残しており、東南西の三方の突出が確認できる。周囲の小室は115室あり、外周の広さは一辺の長さが165m (550ft) ほどある。規模としてはヴィクラマシーラやソーマプラの両寺に比べて一回り小さいが、マイナマティ遺跡群ではもっとも規模の大きいものに入る。また正式の出入り口としては北門を有していることも両寺と同じである。ただし東南西の三方には両寺に見られるような門構えはない。なお中央の主堂基壇部の側面にあったテラコッタは現在ほとんどはざされておき、そこでは見ることはできない。<sup>(10)</sup>

ところで、マイナマティ遺跡群のある丘陵部は現在その大半が軍用地になっており、容易に視察することはできない状況にある。今回マイナマティ遺跡群で視察した遺跡はサルバンヴィハーラのほかに、ルプバンムラとイタコラムラ、そしてマイナマティパレスであった。十字形の塔に関していえば、ルプバンムラとイタコラムラにもその存在が



〔図5〕  
ルパンムラの塔の  
南西面



〔図6〕  
イタコラムラの祠堂の  
東正面



〔図7〕  
イタコラムラの祠堂の  
西裏の塔跡

確認された。

ルプバンムラ (Rupban Mura) の塔は二層からなり、ソーマプラやサルバンヴィハーラの中央の塔と異なり、東面が正面となる東向きになっている【図5】。塔全体の平面の大きさは東西、南北がそれぞれ28mほどある。第二テラスの塔身は正方形で、四方にそれぞれ祠堂を有し、その前に前室らしきものをもつ。ただし東面は他の三面と異なり、三祠堂の形式になっている。またこれらの祠堂を巡るように第一テラスの上には繞道が配されている。さらに、この塔の東側前方には階段があり、その階段を降りて南側に20数室の僧坊をもつ遺構があった。

これに対し、イタコラムラ (Itakhola Mura) は長方形の東向き祠堂である【図6】。東側の正面に入口があり、そこから細長く通路が西側奥に伸び、その奥に仏像が祀られていたようである。北側と南側の外壁には等間隔で龕室のようなものが、それぞれ七ヶ所あり、東側正面入口の両側にもそれぞれ一ヶ所あった。またこの祠堂の西裏側には方形の区域がありその中央に中規模の十字形塔の跡が確認された【図7】。この塔もその突出した形体から東向きになっているようで、おそらく祠堂の中を拝した後、その周囲を巡って西裏側において仏塔を拝するようになっていたのであろうと考えられる。またこの祠堂跡に隣接して北側前方に僧房らしき遺構が未発掘状態ながら認められた。

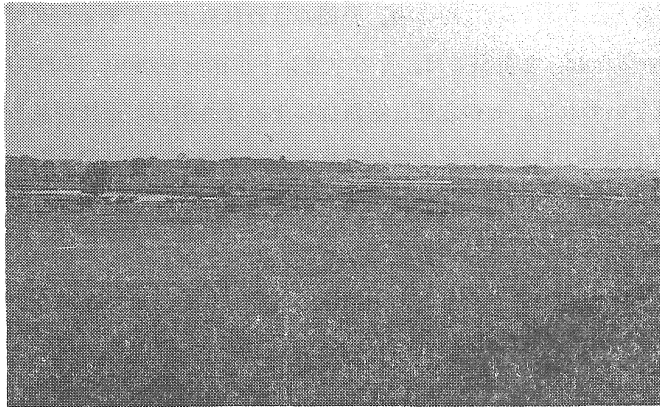
なおマイナマティパレス (Mainamati Palace) の跡は未発掘で、その跡地は現在芝生におおわれ美しい公園になったままであった。

### c) マハスタン遺跡群

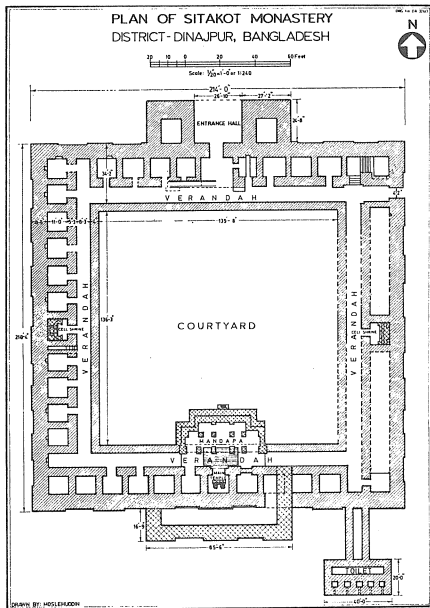
次に、マハスタン (Mahasthan) 遺跡群であるが、この遺跡群はソーマプラの東南にあり、ボーグラの北方12.8km (8 mile) のところにある。カラトヤ (Karatoya) 川の西側に広大なこの遺跡群が広がっている。コミラのマイナマティ遺跡群とともに、バングラデシュの代表的な遺跡群として知られている。しかも歴史的には最も古く由緒あるところである。バングラデシュを含むベンガル地方は、古代にはアーリヤ文化の圏外にあったところで、マハスタン遺跡群のある北ベンガルの地域にはプンドラ人が住んでいたといわれている。玄奘三蔵がこの地を訪れた時はプンドラヴァルダナ (Pundravardhana) 国が栄えていた。マハスタン遺跡群の東端にある城塞 (Mahasthangarh) はそのプンドラヴァルダナ国の都城跡に比定されており、またその遺跡群の北西にあるビハール (Bihar) とヴァスビハール (Vasu Bihar) の両村にわたる地域は『西域記』の跋始婆僧伽藍の寺跡にあたりと見なされている。

ヴァスヴィハーラ (Vasu Vihāra, Bhasu Vihāra) はマハスタンの都城跡から北西

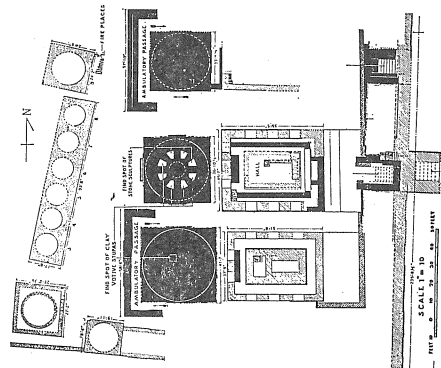




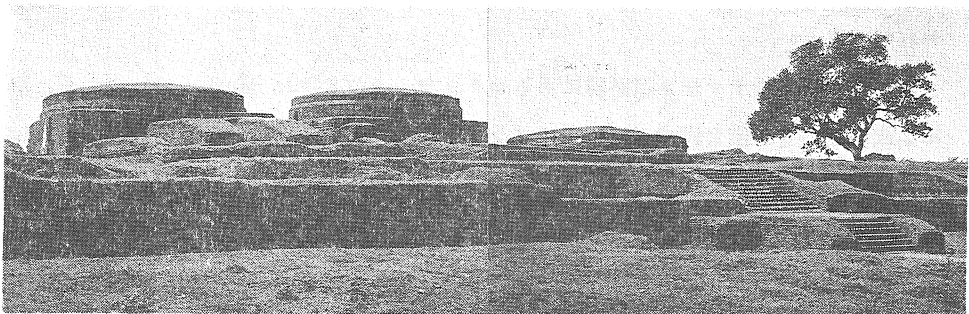
〔図8〕  
ヴァスヴィハーラの塔跡



〔図9〕  
シタコット寺のプラン



〔図11〕コティラムラのプラン



〔図10〕コティラムラの三宝塔

6.4km (4 mile) のところにある。われわれはその中、発掘の行われたナラパティルダブマウンド (Narapatir Dhap mound) を視察した。そのマウンドは南北が240m (800ft) 東西が210m (700ft) あるといわれる。その北部と南西部にそれぞれ僧房の遺構が見られ、その南東側に中規模の十字形、あるいは半十字形の塔の跡が確認された【図8】。その塔はもともと三層形式で、南北が37.5m (125ft)、東西が26.1m (87ft) の大きさを持ち、基壇はテラコッタで飾られていたと報告されている。しかし、われわれが視察した時には、その面影はなく、ただ基壇の存在をしめす遺構が確認されただけであった<sup>(11)</sup>。

#### d) その他の仏教遺跡

バングラデシュには、今回われわれが訪れたところ以外にも多くの仏教遺跡が散在している。しかしその多くは経済的な事情もあって必ずしも順調に発掘、修復作業が進んでいるとは言い難い。ただそれらのいくつかの遺跡については報告もあるので、以下簡単に紹介しておきたい。

北ベンガルのラジシャヒ地区の北部、ディナジプル (Dinajpur Dis.) にシタコット (Sitakot) 寺跡がある【図9】。この寺跡のプランは東西、南北それぞれ64.5m (215ft) の方形で、北門を有する。中央内庭を取り囲む周囲には41室ほどの小室があり、廻廊で結ばれている。南側の中央区域には祠堂をもつ。形式的にはソーマプラ寺やサルバンヴィハーラと同じであるが、中央内庭に塔はない。この僧院様式は同時代のものとしてはナーランダー寺の僧院跡などによくみられる<sup>(12)</sup>。

またマイナマティ遺跡群にはアーナンダヴィハーラ (Ānanda Vihāra, Ānanda Rājā's Palace) の遺跡がある。アーナンダラージャはデーヴァ朝の3代目王のアーナンダデーヴァ (Ānandadeva) のことであると考えられている。この遺跡はサルバンヴィハーラより少し大きく一辺200m (624ft) 近くある方形プランの僧院である。内庭中央には十字形、あるいは半十字形の塔を配し、それを取り巻くように正方形の小室列が存在する。北側の小室列の中央には北門を配し、サルバンヴィハーラと同じ様式をもつといわれている<sup>(13)</sup>。

また同じくマイナマティ遺跡群にあるコティラムラ (Kotila Mura) は、東向きに縦に仏法僧という三宝を表す三塔形式のプランをもつ珍しい遺跡で、それぞれ方形の基壇に円形の塔身をもつ【図10】。バングラデシュの比較的大きな塔にはめずらしい円形のストウーパである。中央にある法宝を表す仏塔の方形基壇の基部には円形の八輻輪の遺構がある【図11】。これはナーガルジュナコンダなどで見られるインド仏塔基部の様式を受け継ぐものとして貴重である。これら法輪形は密教の曼荼羅でも採用されており、

その意味でも曼荼羅の原型の一つとして仏塔の存在を考慮する必要があると考えられる。なお三宝塔の前にはそれぞれ次の時代に建てられた長方形の前室がある<sup>(14)</sup>。

その他、十字形塔はソーマプラの南西 14.4km(9mile)のところにあるハルドヴィハーラ (Halud Vihāra) でも発見されている<sup>(15)</sup>。

### Ⅲ. 十字形塔の流れ

以上のように、バングラデシュの主要な仏教遺跡には十字形の塔をもつものが多い。塔の様式としては、従来の半球形の覆鉢をもつストゥーパと異なる。たとえばソーマプラの十字形塔は、中央の方形塔身の四方にそれぞれ突出した祠堂を配しており、その意味で祠堂であって、仏堂としての性格を示している。また塔の様式としては高塔形 (vimāna, śikhara) に入ると認められている<sup>(16)</sup>。そこで次にインドにおける十字形プランをもつ塔の事例として、ストゥーパと高塔について紹介したい。

#### a) 十字形ストゥーパの事例

仏教文化の存在を示す考古学上の発見の中で、仏塔 (stūpa) は仏像と並んでとくに重要である。西暦前 4、5 世紀に成立した仏教が、その後しだいにインド各地に伝播し定着していく過程で、ストゥーパの果たした役割は大きい。仏塔はとくに在家信者の信仰の拠り所であったが、この仏塔信仰はアショーカ王以降とくに一般化し、比丘の礼拝対象としても重要な位置を占めるようになった。その後、仏塔信仰は大乗仏教の興起を促す中心的な要因にもなったといわれている。またガンダーラやマトゥラーでの仏像の出現を見るにいたって、礼拝対象としてストゥーパに代わり仏像が重視されるようになるが、一方で仏塔信仰も引き続き保持された。ストゥーパは時代や地域によってその意義も変容し、その様式も変化した。ストゥーパの重要性はインド仏教の最後期を飾った密教の時代においても存続し、しかもインド本国をこえて伝播した仏教の文化圏にある地域でも保持されている。このことはストゥーパが仏像と並んで、仏教信仰を形成する主要な要因であったことを物語っている。

インドにおけるストゥーパは、例えばサーンチ大塔のように、基本的には円形のプランをもち、円形の基壇の上に半球形の覆鉢をもつものが一般的である。しかしその一方で部派仏教の律蔵にも伝えられているように、十字形プランにつながる四方に突出をもった方形の下部基壇をもつストゥーパの存在も報告されている<sup>(17)</sup>。なお律蔵には、ストゥーパのプランとして四方形、円形、八角形も説かれている<sup>(18)</sup>。この方形の下部基壇をもつストゥーパは、タキシラやガンダーラをはじめとする西北インドでよく見られ、さらに

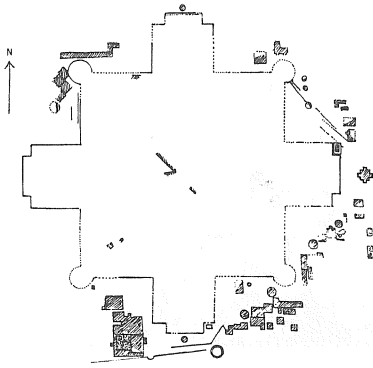
この様式は西域地方にも伝わっている。

西北インドに見られる十字形ストウーパの中で最も有名なのは、現在ペシャワール (Peshawar) の東南にあるシャー・ジー・キー・デリー (Shāh-jī-kī-Ḍherī) の仏塔である【図12】。ここは法顕や玄奘によって記録されているカニシカ大塔の跡と見られている。このシャー・ジー・キー・デリーのストウーパは、四角形の基壇の各四方に階段のある方形の突出をもち、また四隅に円形の小塔をもつことが明らかとなっている。その四方の突出部を含めた大きさは、東西、南北ともに87mあり、四方の突出部を除いても各56.5mある壮大な仏塔跡である。またこの大塔の東面に同じプランの小塔も発見されている。<sup>(19)</sup>

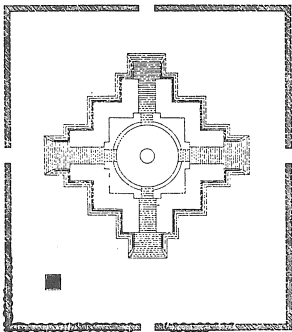
このカニシカ大塔のほかに、十字形プランをもつものとして、ペシャワールの西のジャムルード (Jamrud) のジャーカーラ・バラ、ジャララーバード (Jalalabad) のアヒン・ポーシュ、タキシラ (Taxila) のバマラ、さらにアフガニスタンのバルフ (Balkh) にあるトープ・イ・ルスタムなどの各ストウーパの存在が知られている。

また西域地方でも確認されており、西域南道のコータン (干闥 Khotan) 北東にあるラワクのストウーパはその代表である【図13】。50m四方の壁の中に、12、13mのストウーパがあるが、その塔は三層からなり、第一テラスと第二テラスは方形で、それぞれ四方に突出部をもち階段が取り付けられている。第三テラスの塔身は円筒形で、その上にあるべき半球形の覆鉢は崩れ落ちているといわれている。<sup>(20)</sup>

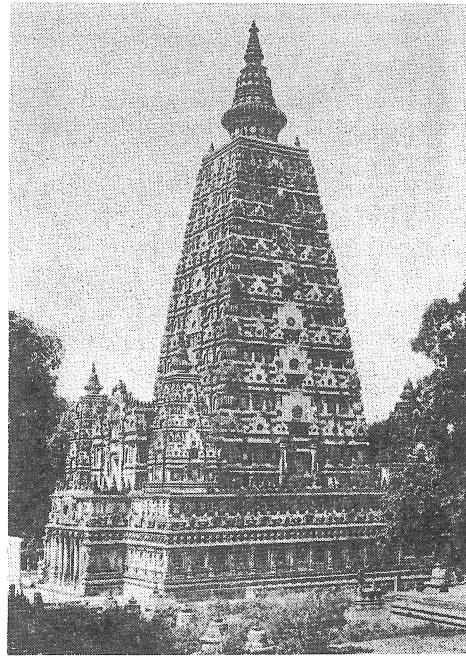
これら西北インドを中心に残る十字形プランは、下部の基壇が四方形を基本に各四方に単純な突出部をもつ点で、十字形の素朴な形態を示している。これに対し、時代は下がるが、カシミール地方のスリナガル (Srinagar) の北西24.4km (14mile) のところにあるパリハーサプラ (Parihāsapura、現在の Paraspora) に残る仏塔跡は、下部の二層の基壇のみが残るだけであるが、各四方に二段の突出をもち複雑度を増している。この点はバングラデシュのソーマプラ寺も同じで、北側は別にして基本的に一致する。ただしバングラデシュには上記の素朴な形態を残すものもある。複雑な突出部をもつ最たる例は、北ビハールのチャンパーラン (Champāran) 地区のラウリアー・ナンダンガルフ (Lauriyā-Nandangarh) にある。ラウリアーにはアショーカ石柱の周囲の南から西にかけて二十ヶ所ほどのマウンドがあり、古い仏塔跡が発見されている。それらの南方でアショーカ石柱から南西1.6kmにあるナンダンガルフで、多角形の巨大なストウーパ跡が確認されている。中心の直径は152.5mあり、五層の基壇の上にさらに457mの円周をもった円形の基壇があるといわれているので、インドのストウーパとしては最大級のものであろう。<sup>(22)</sup>



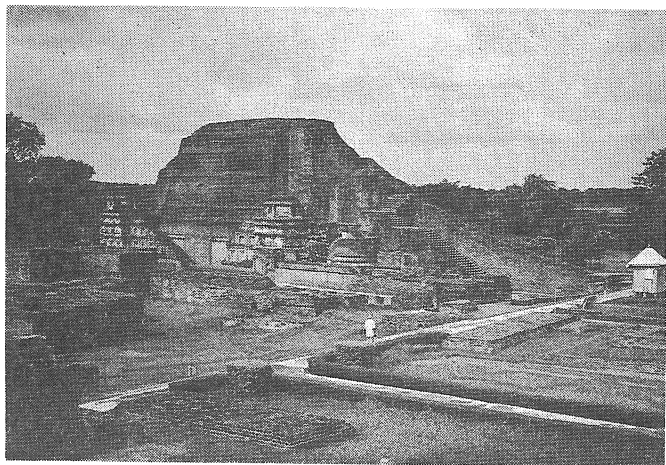
〔図12〕  
シャー・ジー・キー・デリーの大塔プラン



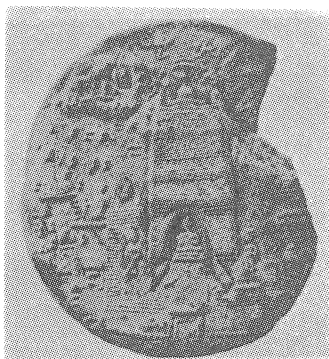
〔図13〕  
ラワクの仏塔プラン (A・スタイン)



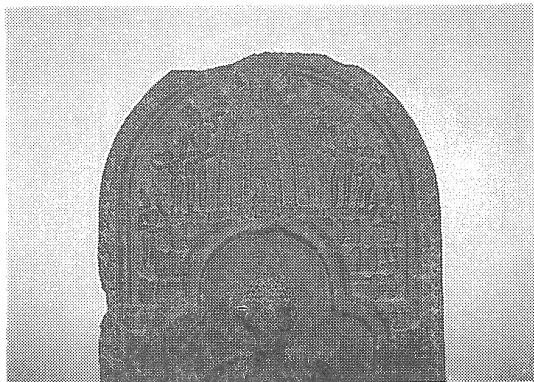
〔図14〕  
ボードガヤーの大塔



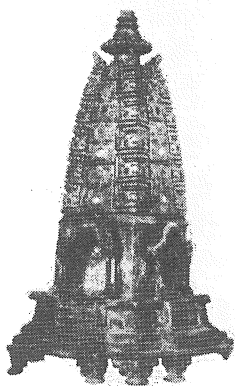
〔図15〕  
ナーランダー寺の主塔



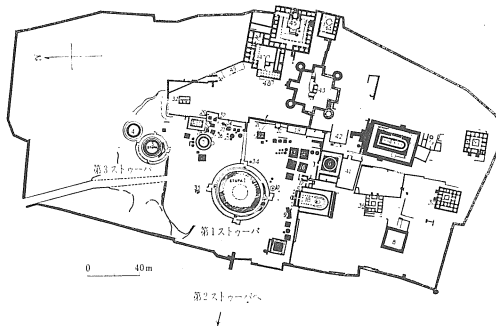
〔図16〕  
クムラハール出土の奉献板



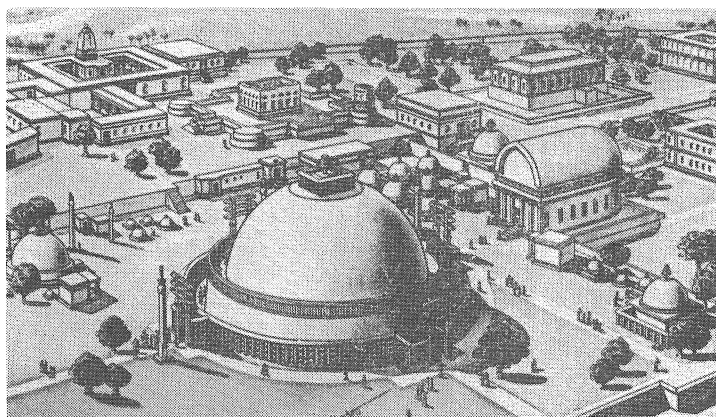
〔図18〕  
阿弥陀如来像の上部



〔図17〕  
ジュワーリ出土のミニチュア



〔図19〕  
サーンチーの遺跡図



〔図20〕  
サーンチーの復元図（P・ブラウン）

以上のように十字形プランは、すでに西北インドを中心に存在するストゥーパの下部基壇でおこなわれていたことが知られ、またそれが始まったのは、この西北インドを中心に西暦5、6世紀ごろには始まっていたと言われる。<sup>(23)</sup>

## 6) 高塔の事例

次に高塔の事例であるが、これに関してもシャー・ジー・キー・デリーのカニシカ大塔が注意される。この大塔がはたして法顕や玄奘をはじめとする中国巡礼僧の記録するカニシカ大塔(雀離浮屠)であるかどうか多少問題も残されている。しかし、この塔がカニシカ大塔であるとすれば、中国僧の記録から推測して、このストゥーパは従来の半球形の覆鉢をもったものではなく高塔形に入り、ストゥーパとしては異例の覆鉢をもたない方形の存在も認められなければならないという一説もある。<sup>(24)</sup>これは塔身の存在しない今日では推測の域をでないが、パングラデシュの十字形塔への流れの中で注意される点である。

高塔(vimāna, śikhara)の起源は必ずしも明らかでないが、グプタ朝時代には存在したといわれ、ヒンドゥー教寺院ではヒンドゥー教の神像を祀る祠堂として発展し、当時の遺跡も数は少ないが残っている。この高塔はその後とくにヒンズー教寺院の大きな特徴になるが、仏教やジャイナ教の寺院でも建てられている。そのプランの特色として方形、あるいは方形の一方乃至四方に突出をもっている点があげられる。<sup>(25)</sup>

仏教における完全な高塔の現存事例は少なく、ボードガヤー(Bodhgaya)にあるマハーボーディ(Mahābodhi)寺がその唯一の例であるといわれている【図14】。この大塔はそこから出土した銘文によって金剛座の大香堂(Vajrāsana-brhad-gandhakuṭi)と呼ばれていたことが知られ、大香堂という点で通途の仏塔とは違い、ヒンドゥー教の高塔に近いと言われている。現在の大塔は北型ヴィマーナの様式をもつといわれ、その四隅に小塔を持つ点を特色としている。四隅に小塔をもつ例はナーランダールの主塔にも見られる【図15】。この様式はヒンズー教寺院にも例が見られるもので、仏教における先例はすでにシャー・ジー・キー・デリーにあると考えられる。ボードガヤーの大塔の今の外観は19世紀の大改修を受けているため、古い時代の姿を伝えない面があるが、パトナ近郊のクムラハールから出土した奉献板【図16】は一説にボードガヤーの精舎を写したものだと言われ、古い時代にこの地に高塔が存在したことを証明している。この奉献板はグプタ朝時代を下らないといわれている。この奉献板に見られる塔は五層からなる高塔で、その上にストゥーパを置き、また最下段正面に仏像が祀られている。<sup>(27)</sup>またこの大塔を写したと言われているジェワリー(Jewari)から出土したブロンズ製のミニチュア

【図17】は最下部の四方に龕室が設けられている。形式的には四方形のプランである<sup>(28)</sup>。またパーラ朝時代に黒玄武岩でつくられた仏像などには上部に高塔のレリーフが描かれてあるものがあるが、これらは当時の高塔様式の一例として注意される<sup>(29)</sup>【図18】。なおこの精舎の北側にあった摩訶菩提僧伽藍の遺構が確認されているが、その中央の塔跡は十字形プランを示している点で注目される<sup>(30)</sup>。

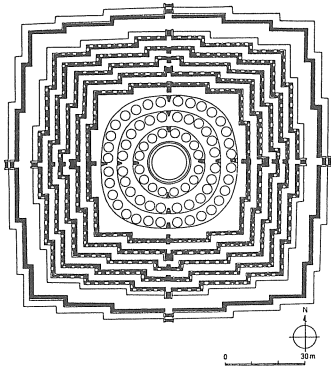
さてボードガヤーの大塔と並んで高塔の存在が指摘されているのは、サルナート(Sārnāth)の主塔跡である。この塔は根本香堂(Mūlagandhakuṭī)と呼ばれていた点から金剛座の大香堂に類するものと認められる。そのプランは十字形で東に入口があり、最下部は祠堂になっていたようである。このサルナートには他に十字形の小さな奉献塔も存在する<sup>(31)</sup>。なおシャー・ジー・キー・デリーと同じ様式の遺構がサンチー(Sānchi)大塔の北側にも存在する【図19】が、その復元図は【図20】シャー・ジー・キー・デリーの形態を考察させる点でたいへん興味深い。また十字形の香堂(Gandhakuṭī)の跡はシュラーヴァスティ(Śrāvastī)のジェータヴァナ(Jetavana)にも存在する<sup>(32)</sup>。

以上、インドにおける十字形ストゥーパならびに高塔を見てきたが、バングラデシュの十字形塔は、西北インドを中心に発達してきたストゥーパおよび高塔の流れのうえにあるといえる。しかもソーマプラ寺に見られる方形の僧院様式も北西インドで発達したもので、その意味からパーラ朝時代の仏教建築はその影響下にあったと考えられる<sup>(34)</sup>。

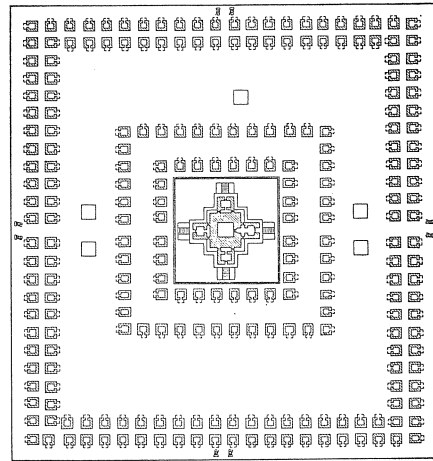
なおバングラデシュの十字形塔は様式上、方形の高塔形式の祠堂であり、一般に円形プランをもつストゥーパとは異なる。それゆえバングラデシュの十字形塔は直接的には高塔の流れのうえにあるといえる。しかしその一方で、たとえばパーラ朝時代の奉献塔(votive stūpa)でも、四方の壁龕に仏像を安置した例が多くみられ<sup>(35)</sup>、ソーマプラ寺の塔などと類似した構成をもっており、ストゥーパとの相互関係も認められ、ストゥーパからの影響も否定できない。これら奉献塔によく見られるストゥーパと仏像が融合した例は、すでにエローラの石窟寺院に現れており、インド仏教史においてストゥーパと仏像は密接な関係を有していることは重要である。それゆえバングラデシュの高塔は本来的には仏陀の舎利を祀ったストゥーパとは異なるものの、それに準じた性格をもち合わせていたように思われる。それはストゥーパが、より広い概念をもつと思われるチャイティヤ(caitya)信仰の中に融合していった点に見い出される。それはストゥーパも高塔もともにチャイティヤとして位置付けられることによる<sup>(36)</sup>。

### c) その他の十字形塔の事例





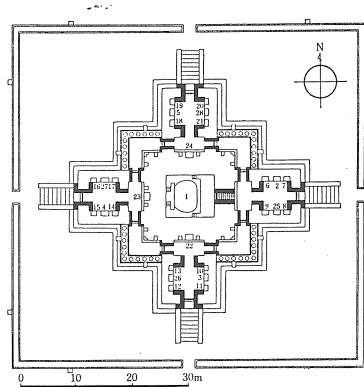
〔図21〕  
ボロブドゥールのプラン



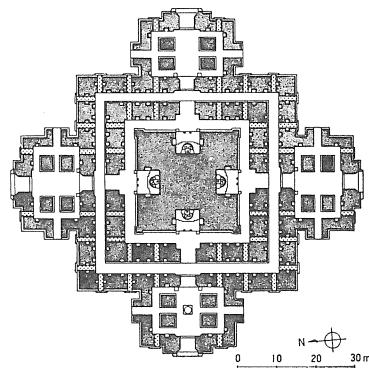
〔図22〕  
チャンディ・セウのプラン



〔図24〕  
チャンディ・セウの小祠堂内の宝生如来像



〔図23〕  
チャンディ・セウの主堂プラン



〔図25〕  
アーナンダ寺のプラン

ところで、パーラ朝に栄えた仏教は密教が中心であった。このパーラ朝時代の密教の影響は、近隣諸国のネパールやチベット、また海を隔てたインドネシアなど東南アジアの国々に見ることができる。

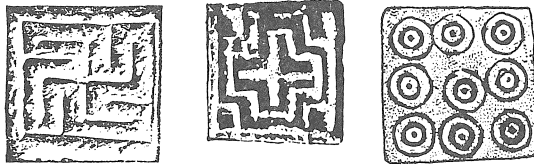
十字形プランをもつストゥーパについても、上記でみたラウリヤー・ナンダンガルフの仏塔跡と同様に、インドネシアの中部ジャワ(Java)にあるボロブドゥール(Borobudur)は、複雑な突出部をもった多角形塔の代表例であるといえる【図21】。ボロブドゥールについてはいろいろと議論があるが、基本的には多層の方形基壇の上に円形のストゥーパを置いた仏塔であり、金剛界曼荼羅<sup>(37)</sup>であると考えられる。

またソーマプラ寺と同様のプランをもったものとしてチャンディ・セウ(Candi-Sevu)がある【図22】。チャンディ・セウは中央の高塔が十字形プランをもっており、東を主要な入り口にしている。内部には仏像を安置したであろうと思われる基壇が多くあり【図23】、一説には金剛界曼荼羅の諸尊が祀られていたといわれている<sup>(38)</sup>。現在のところまだその確証はないが、その周囲を取り巻く小祠堂群の内部にはいずれも仏像を安置する基壇が残っており、その石像の一部も残っている【図24】。それらの仏像は転法輪印、触地印、与願印、定印のいずれかを結んでおり、破壊されやすい施無畏印を含めると五仏が揃うことになる。これらの仏像は金剛界曼荼羅にしたがって賢劫千仏としての性格を担っているとする説はたいへん興味深い<sup>(39)</sup>。

このチャンディ・セウは一般にヴィクラマシーラやソーマプラにみられる僧院プランの伝統を継承しているといわれている。ヴィクラマシーラやソーマプラには、このような曼荼羅に関する痕跡を示す遺品は確認されていない。しかし、そのプランのイメージは、密教を研究するものには、金剛界曼荼羅のイメージを想起させるものがある。とくに『真実撰経』の三昧耶曼荼羅の中央に仏塔をもつて表す点につながる。しかし逆の発想も成り立つのであって、曼荼羅自体がインドの仏塔や祠堂の発展と平行して展開してきた面もありうるであろう。

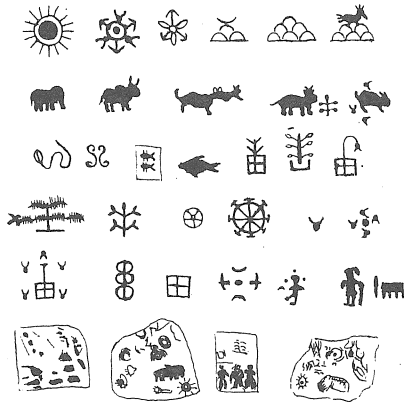
インドネシアには、このほか同じく中部ジャワ期のチャンディ・カラサン(Candi-karasan)などの仏教遺跡や、チャンディ・ロロジョグラン(Candi-Lolojogran、チャンディ・プランバナナ Candi-Pranbanan)などのヒンドゥー教遺跡にみられるように十字形プランの高塔式祠堂が多く存在する<sup>(40)</sup>。

またバングラデシュの隣国であるミャンマー(ビルマ)にも十字形プランの高塔が存在する。パガン(Pagan)のアーナンダ(Ānanda)寺をはじめとするパゴダ(Pagoda)はその代表である【図25】。またカンボジアのアンコールワット(Angkor Wat)をはじめとするクメール建築も十字形プランに基づいているといえるし、ベトナムのチャンパ



〔図26〕

インダス文明の幾何学文様の  
ある印章

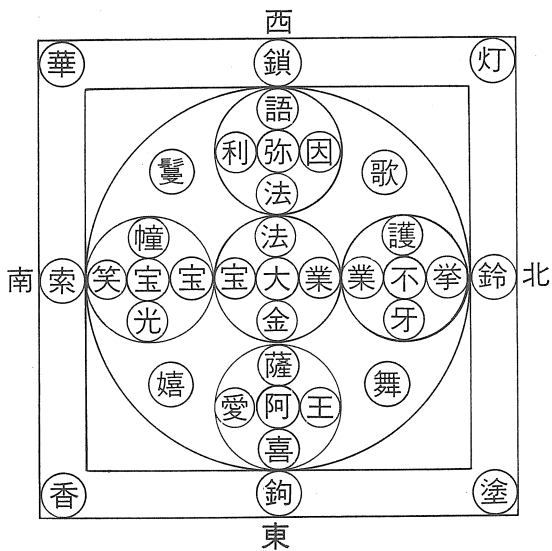
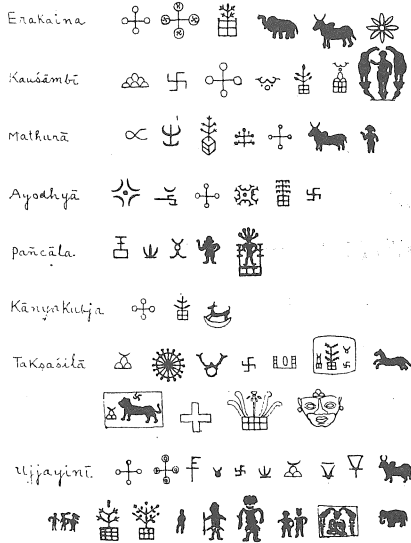


〔図27〕

古代貨幣のモチーフ

(左)刻印を打った古銭の意匠

(右)母型で鋳られた古銭の意匠



〔図28〕

金剛界曼荼羅のプラン

一の仏教、ヒンドゥー教遺跡も同様である<sup>(41)</sup>。

このように東南アジアの仏教、ヒンドゥー教の建築様式は、インド中世の仏教およびヒンドゥー教の高塔様式に基づく十字形プランの影響を受けている。

#### d) 十字形のモチーフ

バングラデシュの十字形塔の基本プランは、単純に言えば正方形と十字形の単純な組み合わせからなっている。このモチーフはインドでは長い伝統をもつものとして重要である。

たとえば、十字形のモチーフは、すでにインダス文明の遺跡から発見されており、卍形などとともに、十字形のモチーフをもった印章が発見されている<sup>(42)</sup>【図26】。これらの印章は護符としてなにか宗教的な意味が含まれていたようである。またこの十字形は古代の貨幣のモチーフとしても多用されていることも注目される<sup>(43)</sup>【図27】。

仏塔との関係でいえば、仏陀が最後の旅の中で阿難にこたえて、転輪聖王の葬法に倣って塔の作られるべき場所として示した四辻(cātummahāpatha)も考慮されるべきであろう<sup>(44)</sup>。しかもインドのストゥーパの事例として、仏塔基部のプランに石や煉瓦によって十字形や卍形、さらに法輪形(車輪形)が作られたものがあるのも興味深い。これらのモチーフは、いずれも太陽のシンボルであるとされ、転輪聖王と関係をもつと言われている<sup>(45)</sup>。

また一方、これらのモチーフは密教の曼荼羅の中でも認められ、たとえば十字形は『真実撰経』の説く金剛界曼荼羅などのモチーフとしても採用されていると考えられる【図28】。とくに須弥山頂に住する毘盧遮那如来は一切方に面を(sarvato mukham)<sup>(46)</sup>向けるとされるが、その図形として一説に四面(caturmukha)毘盧遮那が用いられ、その四方に四仏が住する展開にも明らかに十字形が基本になっていることがわかる。

その意味で、唯識思想の四智五智説を活用した『真実撰経』における毘盧遮那如来の四種神変説<sup>(47)</sup>や、さらにはそれに類似した思想構造をもつパンチャラートラ派のヴェーハ(vyūha)<sup>(48)</sup>説は、この十字形のモチーフを思想的哲学的に展開したものとして位置づけられるかもしれない。しかもこのことから十字形は、卍形や法輪形と同じく太陽のシンボルとされているように、単に二本の線が交わったところを意味するのではなく、二本の線の交わる中心点を起点にして、四方への広がりとして扱えられるべきモチーフであることが分かる。それゆえ、従来の三部三尊形式から四部四仏形式(あるいは五部の五仏形式)への転換をはかり、それに導く儀礼として瑜伽行を導入した『真実撰経』は重要である。

なお四角四面のプランをもつ塔身は、インド宇宙観の中心にそびえる須弥山としての性格をもつもので、宇宙樹、宇宙軸の一面をもつといえる。この点も『真実撰経』の金剛界曼陀羅と共通した要素をもっている。それゆえ、推測の域をでないが、バングラデシュの十字形の高塔 (vimāna, śikhara) と、金剛界曼荼羅の現出する須弥山頂の金剛摩尼宝峯楼閣 (vajramaniratna-śikhara-kūtāgāra) との関係が考慮されてならない。

このように十字形は、インドにおいてインダス文明以来、きわめて重要なモチーフであったことが理解できる。それは建築上の構造的な問題だけでなく、一方でインド人の文化思考として宗教的世界観に根ざしたものであったといえる。

#### IV. 密教における塔の位置

以上、バングラデシュの仏教遺跡に見られる十字形プランの塔について、インド内外に残る事例とともに紹介した。そこで最後に、今後の研究課題として密教における塔の位置について少し触れておきたい。

##### a) 大乘仏教と仏塔信仰

インドで仏像が製作された西暦1、2世紀ころ、ほぼ前後して大乘仏教が興起したといわれている。現在のところこの仏像の製作に大乘仏教が直接関与したかどうか分かっていないが、<sup>(49)</sup>その後の仏像製作に大乘仏教が与えた影響は無視できないであろう。また、その後のインド仏教の信仰形態に及ぼした影響も大きいと考えられる。たとえば西北インドでは、この仏像は当初ストウパの基壇や円筒部に取り付けられたり、またストウパの周辺の小祠堂内にまつられたりしたが、時代が下ると仏像をまつる祠堂とストウパが対等になり、仏像をまつる祠堂が伽藍の中でも大きな比重を示すようになるといわれる。この傾向は西北インドの影響を受けた西域ではとくに著しいようである。<sup>(50)</sup>

しかしストウパ信仰は大乘仏教の興起を促した主要な要因にあげられているように、大乘仏教では重要な信仰形態であった。大乘仏教では仏塔供養が菩薩の実践の一つとされ、成仏に導くとされている。

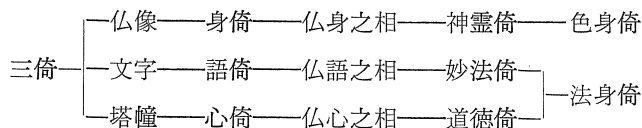
このストウパ信仰を示す代表的な経典が『法華経』である。『法華経』は八王分骨の伝統を受け継いで、仏塔信仰を説くものとして有名である。しかも、この仏塔信仰と『法華経』の経典受持とを総合し、経典の権威を仏塔によって証明している。これに対して、『般若経』では仏塔信仰は経典受持に及ばないとして、「仏の立場」とされる仏塔信仰よりも「法の立場」とされる経典受持を重視する。それは如来の如来たるゆえんが、一切智を得ていることに求められていることによる。すなわち、如来の滅後にその

舍利が尊重されるのは、一切智が如来の身体(舍利)を拠り所としていたためであり、この一切智は般若波羅蜜から生ずるとする『般若経』では、『肉身の舍利』よりも「法身の舍利」を尊重するのであるといわれている。この思想は『維摩経』に継承されている。しかし『般若経』でも仏塔供養の功德の高いことは認めている。また『般舟三昧経』では観仏三昧を得る行法の一つとして、仏の形像や画を作り、この三昧をうるための方便として仏像をモデルに観想をなすことが説かれている。この『般舟三昧経』を受持する菩薩たちは仏塔を中心に活動していたと言われる。また善財童子の遍歴物語で有名な『華嚴経』の「入法界品」でも、仏塔は過去諸仏の遊戯処とされ重要な位置にある。すなわち善財童子は、南インドの覚城(Dhanyākara, Dhānyakataka)の大塔(mahācāitya)を住处とした文殊菩薩に教えを受けて菩提心をおこし、この大塔を拠点として求法の旅にのぼるのである。<sup>(51)</sup>

このように大乘仏教は仏塔供養を重視した。そして、その一方で法の永続性の問題に関連してさまざまな仏、菩薩を産み出して仏身観を発展させていったが、仏像は法の伝達者(説法者)である具体的な諸仏諸菩薩の色身を表徴するものとして尊崇された。密教は、この大乘仏教の発展を受けて、これら仏教信仰の基盤にある仏塔、仏像、経典などを主要な儀礼的要素に組み入れ体系化していった。それはすでに指摘されている大乘思想の儀軌化という点につながる。<sup>(52)</sup>

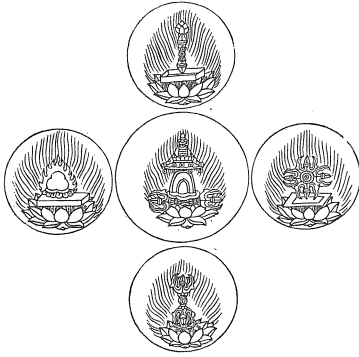
## b) 密教における仏塔

密教では、その修法体系の中で三密行が重視されている。例えば『造像量度経引』の「三倚之造法」では次のように位置付けられている。<sup>(53)</sup>



これによって分かるように、能説の人たる諸仏諸菩薩を表す仏像(大印)は身密に、所説の法たる経典や真言陀羅尼や種字(法印)は語密に、諸仏諸菩薩の本誓を表す塔や幢(三昧耶印)は意密に相当する。大乘仏教は造像や書写や造塔による功德を力説したが、これらは密教の三密行の中に受け継がれ、種三尊による観法や四種曼荼羅という範疇に取り入れられている。

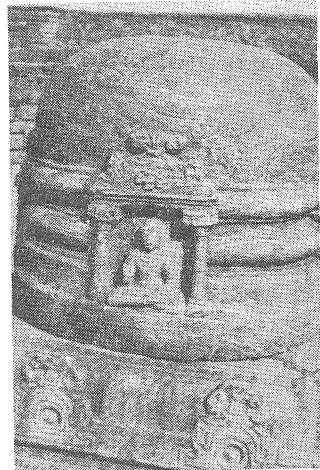
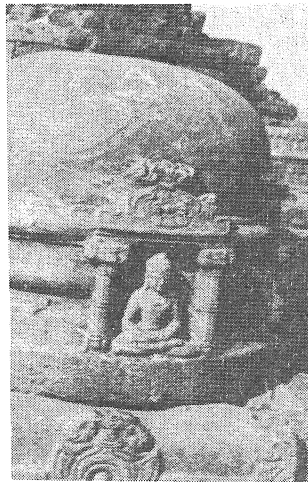
そこで次に、密教経典において塔はどのように説かれているのか、具体的にその事例を検討していきたい。今はその一例として「初会金剛頂経」である『真実撰経』(Sarvathāgatattvasamgraha)の例を取り上げたい。『真実撰経』には、例えば金剛界品



〔図29〕  
金剛界九会曼荼羅の三昧耶会  
(中尊および四波羅蜜)



〔図30〕  
五部心観の金剛界自在〔女〕



〔図31〕  
ナーランダール寺の奉献塔  
(四仏および四波羅蜜)

に、いわゆる大・三・法・羯・四印・一印の六種の曼荼羅が説かれている。それらの曼荼羅の名称と様式名は以下のように示されている。<sup>(54)</sup>

1. Vajradhātu-mahāmaṇḍala (＝成身会、羯磨会)
2. Vajraguhya-vajramaṇḍala (＝三昧耶会)
3. Vajrasūkṣma-dharmamaṇḍala (＝微細会)
4. Vajrakārya-karmamaṇḍala (＝供養会)
5. Vajrasiddhi-mudrāmaṇḍala (＝四印会)
6. Vajrasattva-mahā[sattva]maṇḍala (＝一印会)

その中、「金剛界大曼荼羅 (Vajradhātu-mahāmaṇḍala)」に続いて説かれる「金剛秘密金剛曼荼羅 (Vajraguhya-vajramaṇḍala)」は、わが国に伝わる九会曼荼羅の三昧耶会に相当し、四種曼荼羅でいう三昧耶曼荼羅に当たり、諸仏諸菩薩の標識たる様々な三昧耶形によって描かれることになっている【図29】。インド、チベットでは不空三蔵の『十八会指帰』と同様に、この曼荼羅を「陀羅尼曼荼羅 (dhāraṇīmaṇḍala <Tib. g-zuñs kyi dkyil ḥkhor)」と呼んでいる。<sup>(55)</sup> これはこの曼荼羅に説かれる十六大菩薩が陀羅尼の神格 (dhāraṇī-devatā) であることによる。<sup>(56)</sup> しかも『真実撰経』では、その陀羅尼の神格を女性(stri)形で表すことから、『十八会指帰』のように「聖衆皆波羅蜜形に住ず」<sup>(58)</sup> と伝えたものや、『五部心観』のように女尊が三昧耶形を捧持するように描かれたもの<sup>(59)</sup> 【図29】、またチベットの曼荼羅のように女尊形で描かれたものがある。<sup>(60)</sup> しかし、何故この曼荼羅が陀羅尼の神格である女尊形で描かれるのかは定かではない。<sup>(61)</sup> ただ『真実撰経』における「秘密 (guhya)」という語が女性の尊格と関係があることは注意されるべきであろう。また陀羅尼の語義や仏塔との関係も追及されねばならないであろう。

さて、『真実撰経』の本文には五仏の三昧耶形について次のように説かれている。<sup>(62)</sup>

paryaṅkasusthitam caityam Vajradhātviśgarī smrtā/  
 paryaṅke vajravajraṃ tu Vajracitteti kīrtitā//  
 vajraratnaṃ tu paryaṅke Svabhiṣeketi kīrtitā/  
 paryaṅke vajrapadmaṃ tu Āyudheti prakīrtitā//  
 karmavajraṃ tu paryaṅke Sarvavajreti kīrtitā/  
 padmapraṭiṣṭhāḥ samlekhyāḥ prabhāmaṇḍalasamsthitāḥ//

すなわち、「座上にあるチャイティヤが金剛界自在 (Vajradhātviśvari) といわれる」と説かれているように、この場合のチャイティヤ (caitya、制底) はビルシャナ如来の三昧耶形であるとされている。<sup>(63)</sup> そして阿闍・宝生・弥陀・不空の四仏の三昧耶形は、それぞれ金剛金剛 (vajravajra)・金剛宝 (vajraratna)・金剛蓮華 (vajrapadma)・羯磨金



剛 (karmavajra) であると示されている。これら四仏の三昧耶形は四波羅蜜の三昧耶形と同じで、<sup>(64)</sup>四波羅蜜は四仏の本性である四智の印相でもある。

ところで、ナーランダー寺跡に残る奉獻塔 (votive stūpa) の中に、円筒部の四方の壁龕にこれら阿闍仏を始めとする金剛界四仏を配し、その上部にこれら四波羅蜜の三昧耶形を刻したものがあがるが、この場合ストウパの本体は毘盧遮那如来の三昧耶形であることを示しており、その意味でこのストウパは一種の金剛界立体曼荼羅を形成している<sup>(65)</sup>【図31】。これはストウパが毘盧遮那如来や密教の曼荼羅と関係深いことを示している。ストウパ (率塔婆) が毘盧遮那如来の三昧耶形であることは、わが国の『金剛界法』などの儀軌類にも示されているし、またストウパが曼荼羅と関係することは、不空三藏訳の『分別聖位経』や『三十七尊出生義』の中に例証しうる<sup>(66)</sup>。このように『真実撰経』のチャイティヤはストウパと同一視される<sup>(67)</sup>。

ストウパもチャイティヤも仏塔の原語とされている。チベット語ではともにチョルテン "mchod rten" と訳され両語の間に区別を認めない。しかし両語が最初から同義的に使用されていた訳で無く、起源を異にするようである。それが後には同義語として使用されるようになったといわれている<sup>(68)</sup>。しかし上記のように、『真実撰経』の当該箇所がストウパと表記されず、チャイティヤとされていることは、ストウパよりもチャイティヤの語に含まれる性格を重んじていると言えないであろうか。その意味でストウパをチャイティヤの中に含まれるとする説を支持したい。チャイティヤという語が重要なのは、チャイティヤが、本来ヤクシー (Yakṣī, Yakṣiṇī) をはじめとする精霊や、さらには神々や諸仏の住する依代としての性格を有する点にあると考えられる<sup>(69)</sup>。このことは釈尊の墳墓としてまつられたストウパが、釈尊の涅槃のシンボルであるとともに、さらに聖樹・聖壇を意味するチャイティヤとして信仰を集めていったことと無縁ではない。むしろストウパ信仰がチャイティヤ信仰と結び付いたことが重要であったといえる。『真実撰経』では諸仏諸菩薩の集会として曼荼羅を説くが、その具体的な棲処を色究竟天王宮 (Akaṅkṣṭhadevārāja bhavana)<sup>(70)</sup>、須弥山頂の金剛摩尼宝峯楼閣 (Sumerugirimūrdha vajramaniratna-śikhara-kūṭāgāra)<sup>(71)</sup> としている。これらはいずれもチャイティヤとしての性格をもつといえるし、またその写しである実際に描かれた曼荼羅やストウパはわれわれの現実世界におけるチャイティヤであると解される<sup>(72)</sup>。

### c) 金剛界とチャイティヤ

以上のようにチャイティヤ、ストウパは毘盧遮那如来や曼荼羅と密接な関係がある。そこで次に、『真実撰経』における「金剛界」という語義について検討したい。上

記で見たように、チャイティヤは金剛界自在〔女〕（Vajradhātviśvari）と呼ばれている。さらに次の文もチャイティヤと金剛界の密接な関係を示唆している<sup>(73)</sup>。

stabdhalīṅgaḥ svayam bhūtvā nipadyat paṭake site/  
liṅgam caityam adhiṣṭhāya vajradhātur aham svayam//

金剛界とは、金剛界如来という言葉があるように毘盧遮那如来を指す。それゆえ、毘盧遮那如来の三昧耶形であるチャイティヤを金剛界と呼んでも不思議ではない。しかし、『真実摂経』において、チャイティヤが金剛界として性格づけていることを考えると、「金剛界（vajradhātu）」という言葉に仏塔との関係が暗示されているといえないであらうか。すなわち、われわれが一般に金剛界曼荼羅、金剛界如来と呼んでいる、「金剛界」ということば自体に仏塔の概念も含まれていることが予想されるのである。

それは「界（dhātu）」が、仏の身体である舎利（śarira）をも意味することばとしても、すでに使用されていることによって知られる。わが国の密教でも「駄都法」「駄都讚」として如来の遺身舎利を供養する法が伝えられている<sup>(74)</sup>。また大乘仏教でも、たとえば如来蔵經典で、この界が仏性ととともに、仏の舎利を意味することばとして使用されている事例が指摘されている<sup>(75)</sup>。すなわち『般若経』で舎利塔を、「遺骨をまつところ」の意で“dhātugarbha”の名で言及されたのを受け、『涅槃経』では“buddhadhātu”の名で言及して「色身の舎利」から「法身の遺骨」への供養を押し進めているといわれている<sup>(76)</sup>。それゆえ金剛界という言葉自体に、一方で原形として仏陀の舎利や、その舎利をまつたストゥーパに対する信仰が表明されていると考えられる。しかし、その場合の舎利信仰とは第一義的には成仏への志向から、『般若経』以来大乘仏教において展開されてきた法身舎利への信仰にあるといえる。『真実摂経』はその法身舎利を金剛界という言葉によって表明し、その法身の変現である諸仏の現世の住処として、色究竟天王宮や須弥山の金剛摩尼宝峯楼閣を示し、それをまたチャイティヤというシンボルによって示していると考えられる。

#### d) 金剛界の語義

そこで『真実摂経』における、金剛界という言葉の意味についてさらに検討したい。『真実摂経』における金剛界とは、一つには金剛界曼荼羅という言葉があるように、諸仏諸菩薩の集会である曼荼羅を意味する。また金剛界如来といわれるように中尊の毘盧遮那如来をさす言葉としても使用されている。しかしもっとも重要な概念として金剛界という言葉が如来蔵として「菩提心」を意味することは見逃せない。

この場合、金剛とは金剛杵によってシンボライズされるように、堅固にして不壊なる

空性智（五智）を意味することばとして重要である。<sup>(77)</sup>しかしさらに重要なのは界の義である。界は、一般に成分や要素を意味するほかに、文法上では動詞の語根を意味するなど多様な語義をもつ。しかも界の義は、俱舎では生の本、また順正理論では一種の種子説を主張し、唯識では種子、また十地経では諸法の根元にある本性として法界を指し、如来蔵では衆生のうちなる成仏の可能性として仏性を意味するといわれ、何かを生み出すための根源的な力が「界」ということばに託されていると指摘されている。<sup>(78)</sup>

『真実撰経』では『華嚴経』の「入法界品」(Gandhavyūha)にみえるのと同様に、菩提心を界とし、そこに根源的な力をみとめている。すなわち『真実撰経』では、金剛界とは一切虚空界に遍満する「一切如来の身口意金剛界 (sarvatathāgatakāyavākeittvajradhātu)」を指している。<sup>(79)</sup>この一切如来の身口意金剛界を加持された一切義成就大菩薩は、五相成身観の第四段階で「金剛界」という灌頂名を得て金剛界大菩薩となる。この第四段階は法身が菩薩の心にある薩埵金剛(sattvavajra 菩提心)に住する段階で、つぎの第五段階で仏身を円満して金剛界如来として成道するのである。このことは金剛界が因であるとともに果であり、より根源的な法身と不可分な関係にあることを示している。<sup>(80)</sup>『真実撰経』では、法身に相当するものとして、大毘盧遮那(Mahāvairocana)、大菩提心(mahābodhicitta)、普賢大菩薩(Samantabhadra mahābodhisattva)という名をあげて性格づけている。<sup>(81)</sup>このことから『真実撰経』における金剛界とは菩提心としての法身を第一義としていることが理解される。そして法身の展開として、さらに色究竟天に成道した受用身の金剛界如来や、須弥山頂に流出された変化身による金剛界曼荼羅、さらにその写しである画像の金剛界大曼荼羅は、菩提心たる法身と法性を同質(平等性)とする点から金剛界という名称を獲得しうるのである。<sup>(82)</sup>

以上のように『真実撰経』における金剛界は、曼荼羅に象徴される諸仏諸菩薩の依代であるとともに、菩提心に象徴される諸仏諸菩薩を生み出す如来蔵としての性格をもつが、同時にそれはインド土着のチャイティヤ信仰にも関わる側面を強く継承していると考えられる。

なお三昧耶マンダラが、仏の意密たる陀羅尼の神格によって表現され、「秘密曼荼羅」と呼ばれ、また「陀羅尼曼荼羅」とも呼ばれるように、三昧耶形の他に女尊で表される所以も、如来秘密としての如来蔵思想や陀羅尼思想との関係とともに、その一方で聖樹(チャイティヤ)を棲処とする樹精たる、ヤクシーに代表される地母神との関係において追及されねばならないであろう。また『真実撰経』以外の密教経典についてもさらに検討する必要がある。

## V. む す び

以上、バングラデシュの仏教遺跡に関して、特に塔を中心にインドや東南アジアの事例とともに報告するとともに、そこに見られる十字形プランがインドの重要な宗教的モチーフであることを確認した。また密教における曼荼羅が大乗仏教の儀軌化の中で、その教義とともに、釈尊のストウーパ信仰にはじまるチャティヤ信仰を継承するものであることを指摘した。しかし本稿で論じた問題の細部については今後の研究課題としてさらに検討していきたい。

- 註(1) 守屋美都雄「ベンガルの史蹟」(『インド・東南アジア研究センター報告1966—特集東ベンガル』大阪大学インド・東南アジア研究センター編、1966、pp.1-30)、  
村主恵快「東パキスタンの仏教—その遺跡と仏教徒の現状」(同上、pp.31-58)、  
同氏「東パキスタンの仏教遺跡」(『仏教芸術』65、昭42、pp.81-104)、  
同氏「東パキスタンの仏教遺蹟と仏教徒の現状」(『密教学』4、昭42、pp.49-101)。
- (2) オーダンタプラ、ヴィクラマシーラ、ソーマプラ、ジャガッダラについては以下を参照。  
S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, London, 1962, pp. 354-380、  
D. K. Barua, *Vihāras in Ancient India*, Calcutta, 1969, pp.130-137, 153-62, 164-171, 173-177。
- (3) ヴィクラマシーラ寺の遺品遺跡については、わが国でも頼富本宏博士、中村和夫氏によって以下に報告されている。  
佐和隆研編『密教美術の原像』(法蔵館、昭57) pp.43-72、  
頼富本宏「ヴィクラマシーラ遺跡の現状について」(『密教学研究』14、昭57、pp.115-135)、  
同氏著『密教仏の研究』(法蔵館、1990) pp.580-591。  
なお、寺名としてヴィクラマシーラ (Vikramaśīla) を採用することについては奥山直司「ある聖者の伝説—アドヴァヤヴァヅラ伝《Amanasikāre Yathāśrutakrama》に見える修行者像」(『東北大学印度学講座六十五周年記念論集・インド思想における人間観』平3、pp.463-485)の註(20)を参照。
- (4) ヴェレンドリー地方がパーラ朝の故地 (janakabhū paitrabhūmi) であることについては以下を参照。  
R. C. Majumdar et. al. ed., *The Rāmacaritaṃ of Sandhyākaranandin*, Rajshahi, 1939, p. 2、  
Nazimuddin Ahmed ed., *Mahasthan*, Dacca, 1975 (reprint), p. 15。
- (5) テラコッタ印章銘文には 'ŚrīSomapure ŚrīDharmapāladevamahāvihāriyāryabhikṣusaṅghasya' とある。cf. R. B. N. Dikshit, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 55, *Excavations at Paharpur*, Bengal, Delhi, 1938, p. 90。  
また静谷正雄著『インド仏教碑銘目録』(平楽寺書店) pp.209-10を参照。
- (6) A. Schiefner, *Tāranāthae de Doctorinae Buddhicae in India Propagatione*, 鈴木学術財団 復刊叢書2, 1963, p.160、  
Chandra Das, *Pag-sam-jon-zang*, Calcutta, 1908, p.111。  
S. Dutt はチベット資料から、デーヴェーパーラ王が父王のダルマパーラを記念して建立したものと見る。cf. *op. cit.*, p. 375。

- (7) サティヤビルピタについては Dikshit, *op. cit.*, pp. 80-84、および A. Qadir, *A Guide to Paharpur*, Bangladesh, reprint 1980, pp. 35-6を参照。また静谷上掲書 pp. 209-10を参照。
- (8) ソーマプラの遺跡については以下を参照。  
R. B. N. Dikshit, *ibid.*, pp. 1-79、  
A. Qadir, *ibid.*, pp. 1-35、  
Debala Mitra, *Buddhist Mouuments*, Calcutta, 1971, pp. 240-243。
- (9) テラコッタ印章銘文には 'ŚrīBhavadevamahāvihār[īy?] āryabhikṣusaṅghasya' とある。  
cf. D. Mitra, *op. cit.*, p. 245。
- (10) サルバンヴィハーラについては以下を参照。  
D. Mitra, *ibid.*, pp. 243-246、  
A. K. M. Shamsul Alam, *Mainamati*, Dacca, 2nd ed. 1982、  
Rasmohan Chakravarty, *Contributions of Comilla to the Buddhist Culture in Ancient Times*, Comilla, pp. 1-64。
- (11) マハスタン遺跡群およびヴァスヴィハーラについては以下を参照。  
Nazimuddin Ahmed ed., *Mahasthan*, Dacca, 3rd ed. 1981、  
N. Ahmed ed., *Bangladesh Archaeology*, No. 1, Dacca, 1979, pp. 33-67。
- (12) シタコット寺については N. Ahmed ed., *ibid.*, No. 1, pp. 21-33を参照。
- (13) アーナンダヴィハーラについては以下を参照。  
A. K. M. Shamsul Alam, *Maimamati* pp. 49-50、  
N. Ahmed ed., *ibid.*, pp. 68-91。
- (14) コティラムラについては S. Alam, *ibid.*, pp. 47-48 を参照。
- (15) ハルドヴィハーラについては N. Ahmed, *ibid.*, pp. 10-12を参照。
- (16) 村主恵快「東パキスタンの仏教遺蹟と仏教徒の現状」p. 59、  
頼富本宏著『密教仏の研究』p. 585、  
山本智教著『インド美術史大観〈本文篇〉』(毎日新聞社、平2) p. 408。
- (17) 平川彰著『初期大乘仏教の研究』(春秋社、昭43) pp. 633-34、  
杉本卓洲著『インド仏塔の研究』(平楽寺書店、1984) p. 271。
- (18) 十字形プランをもつ塔の存在については、山本上掲書 p. 177、下記註(34)の桑山論文 pp. 345-348、および 宮治昭「西域の仏教美術」(『講座仏教の受容と変容 4〈中国編〉』佼成出版社、平3, p. 250)を参照。  
なお 桑山博士は、その他にガズニーのタパ・サルダール (Tapa Sardar) 仏寺の奉獻小塔、ヴァフシュ (Vakhsh) 河下流クルガン・チューベ (Kurgan-Tybe) のアジナ・テペ仏寺の主塔、さらに、ドモコ・ヤール (Domoko Yar) のファルハド・ベグ・ヤイラキ (Farhad-beg-Yailaki) 第六寺 FIV、ヤール・コト (Yar Khoto)、カラ・コジャ (Kara Khoja)、キチク・ハサール (Kichik Hassar) にもみられると指摘されている。
- (19) シャー・ジー・キー・デリーについては、山本上掲書 p. 177、宮治昭著『インド美術史』(吉川弘文館、昭56、p. 73)、および D. Mitra, *op. cit.*, pp. 118-120 参照。
- (20) ラワクについては、宮治上掲論文 p. 250、長澤和俊・NHK取材班編『NHK大英博物館 5〈中央アジア・東西文明の十字路〉』(日本放送出版協会、1991、pp. 142-145) 参照。
- (21) パラスポーラについては、山本上掲書 p. 395、D. Mitra, *op. cit.*, pp. 112-113 参照。
- (22) ラウリヤー・ナンダンガルフについては以下を参照。  
山本上掲書 pp. 33-34、  
杉本卓洲著『インド仏塔の研究』p. 197、

- D. Mitra, *ibid.*, p. 85.
- (23) 宮治上掲論文 p. 252。
- (24) 山本上掲書 pp. 177-78。
- (25) 高塔については以下を参照。  
宮治上掲書 pp. 117-18、  
村田治朗「建築」(『世界美術全集11 <インド・東アジア>』平凡社、昭28) pp. 22-39。
- (26) ボードガヤーの精舎については、山本上掲書 pp. 109-110、宮治上掲書 pp. 117-18, 143-44、D. Mitra, *op. cit.*, pp. 60-66 を参照。  
なお、大阪教育大学教授の古坂紘一先生より、この大塔の四隅の小塔を含めた五つの塔が五仏を表すという説のあることを御教示いただいた。これについては別の機会に紹介したい。
- (27) 山本上掲書 pp. 109-110、宮治上掲書 p. 118。
- (28) D. Mitra, *op. cit.*, pp. 54-55, Fig. 55。
- (29) このレリーフは、パゴダのアーナンダ寺に似た形式をもっている。なおボードガヤーのレリーフをもったもの (sāccha, molded clay) も存在する。  
cf. Susan L. Huntington and John C. Huntington, *Leaves from Bodhi Tree*, 1990, Seattle and London, Figs. 56, 66, 67。
- (30) 水谷真成訳『大唐西域記<中国古典文学大系 22>』(平凡社、昭46) p. 261 掲載図参照。
- (31) 山本上掲書 p. 314 掲載図参照。またナーランダー寺の主堂周囲の南東部にもある。
- (32) 奈良康明著『仏教史 I <世界宗教史叢書 7>』(山川出版社) pp. 206-08。
- (33) 山本上掲書 p. 379 掲載図参照。
- (34) 桑山正進「タキシラ仏寺の伽藍構成」(『東方学報』京都46冊、1974、pp. 327-354)  
宮治上掲書 p. 73。
- (35) 頼富上掲示書 pp. 593-607。
- (36) 註(69)の羽田野論文を参照。
- (37) ボロブドゥールの金剛界曼荼羅説については、最近では石井和子の説が注意される。なお多角形の同じような列としてチベットのパンコル・チョルテンも注意される。パンコル・チョルテンについては奥山直司「イコンの園へ」(色川大吉編『チベット・曼荼羅の世界』小学館、1989、pp. 131-168) を参照。
- (38) F. D. K. Bosch, *Selected Studies in Indonesian Archaeology*, 1961, pp. 111-33、  
佐和隆研著『インドネシアの遺蹟と美術』(日本放送出版協会、昭48) pp. 112-117。
- (39) 註(38)を参照。
- (40) 佐和上掲書、および千原大五朗『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』(鹿島出版会、昭57) を参照。
- (41) 千原上掲書を参照。
- (42) 宮治上掲書 pp. 4-6。
- (43) 山本上掲書 pp. 62-63。
- (44) 中村元訳『ブッダ最後の旅—大パリニッバーナ経—』(岩波文庫、1980、pp. 132, 168)、  
および杉本上掲書 pp. 298-303。  
また松濤誠達「古代インド 神話・伝説の解釈をめぐる一問題—四辻のシンボリズム—」(『奥田慈應先生喜寿記念・仏教思想論集』平楽寺、昭51、pp. 1141-1151) を参照。
- (45) 杉本上掲書 pp. 230-231。  
なお十字形は宗教的概念や宇宙原理などを象徴するものとして世界的に広く見いだされるといわれる。詳しくは『平凡社大百科事典』(平凡社)、および『大日本大百科全書』

(小学館)の「十字」の項を参照。

またストゥーパの方形基壇およびストゥーパの基部にある車輪形のモチーフはローマ世界の宗教建造物に由来するともいわれる。詳しくは桑山正進「ガンダーラ」(アジア民族造形文化研究所編『アジアの仏教名蹟』雄山閣、昭63, pp. 47-77)を参照。

- (46) 堀内寛仁編『梵蔵漢初会金剛頂経の研究<上>』(密教文化研究所、昭58) §§. 32-33。
- (47) 拙稿「毘盧遮那如来の四種神変」(『密教学会報』26、昭62, pp. (1)-(17))。
- (48) 松原光法「ヴェーハ説の形成[3]—インド仏教史における「パンチャ構造」の共時認識」(『密教文化』178、平4, pp. 126-102)。なおヴェーハ説の起源については、ゾロアスター教のアムシャ・スプンタの影響を見る説がある。  
またジュゼッペ・トウッチ著、ロルフ・ギーブル訳『マンダラの理論と実践』平河出版社、1984, pp. 85-139を参照。
- (49) 否定説については以下を参照。  
高田修著『仏像の起源』(岩波書店、1967) pp. 265-278、  
肥塚隆「大乘仏教の美術」(『講座大乘仏教10』春秋社、昭60) pp. 264-291。
- (50) 宮治上掲示論文 pp. 249-259。
- (51) 以上の大乘仏教における仏塔信仰については、平川上掲書 pp. 549-601による。  
なお「入法界品」において大塔が「過去諸仏の遊止処 (pūrvabuddhādhyūṣita-)とされていることはチャイティヤの性格として興味深い。このことは『真実撰経』で、毘盧遮那如来の住処である色究竟天宮を、「一切如来が住し称讃し讚美するところ (sarvatathāgātādhyūṣitaprasāstavitē)」と表現している点につながると考えられる。
- (52) 松長有慶著『密教経典成立史論』(法蔵館、昭55) pp. 138-149。
- (53) 大正21、938頁下。また森信「八大菩薩とその密教的立場」(『密教学会報』31, pp. 312-317)を参照。  
なお意密の相として、塔 (stūpa, caitya) とともに幢 (dhvaja) があげられていることは幢の重要性を物語る。幢については入澤崇「蓮華蔵世界」(『印仏研』36-2、昭63, pp. 920-927)を参照。
- (54) 堀内上掲書 §§. 203, 345, 449, 519, 569, 600。
- (55) Ānandagarbha, Tattvālokākārī, Toh. No. 2510, fol. 190b,  
F. D. Lessing & A. Wayman, *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*, reprint Delhi, 1978, pp. 225,  
高田仁覺著『インド・チベット真言密教の研究』(密教学術振興会、昭53, pp. 359, 528)。
- (56) 堀内上掲書 §§. 328-36, 320-322。
- (57) 堀内上掲書 §§. 320-22。
- (58) 『十八会指帰』大正18、284頁下。
- (59) 大正図像 2、22頁。また梅尾祥雲著『金剛頂経の研究<梅尾祥雲全集別巻Ⅲ>』(臨川書店、昭60) pp. 232-33など。
- (60) ラダック地方のアルチ寺の三層堂には金剛界品所説の十種の曼荼羅がある。松長有慶著『マンダラ』(毎日新聞社、昭56)、および小林暢善他著『マンダラ蓮華』(平河出版社、昭60)を参照。なお金剛界品所説の曼荼羅の中では、Vajraguhya-vajramāṇḍala (三昧耶会) と Vajrakārya-karmamaṇḍala (供養会) が女尊系である。
- (61) 陀羅尼と女性尊との関係に言及したものに、梅尾祥雲著『曼荼羅の研究』 pp. 263-270、および氏家覚勝著『陀羅尼の世界』(東方出版、1984) pp. 129-141がある。
- (62) 堀内上掲書 §§. 47-49。

- (63) Ānandagarbha, Tattvālokākārī, Toh. No. 2510, fol. 176b, Śākyamitra, Kosalālamkāra, Toh. No. 2503, fol. 139b.
- (64) 四波羅蜜の印相は、それぞれ『真実撰経』の本文に mahāvajravigraha, mahāvajratnavigraha, mahāvajrapadmavigraha, mahākarmavajravigraha と説かれている。cf. 堀内上掲書 §§. 140, 143, 146, 149。
- (65) このナーランダー寺の奉献塔が金剛界の立体曼荼羅であることは、頼富上掲書、図22、p. 544、中村涼應「インドの密教遺跡」(『講座密教文化1<密教の流伝>』人文書院、1984、pp. 33-55)、および Mireill Bénisti, *Contribution À l'Étude du stūpa Buddhique Indien*, Tome II, Paris, 1900, Figs. 110-113 によって確認される。
- (66) 梅尾祥雲「アマラーヴァティの塔と兩天鉄塔説」(『金剛頂経の研究<梅尾祥雲全集>別巻III』臨川書店、昭60、pp. 117-147 再収)。  
『分別聖位経』大正18、288頁上下、『三十七尊出生義』大正18、298頁上。
- (67) 『真実撰経』における caitya, stūpa という語の用例は少なく、caitya が本稿におげた二例を含めて三例、stūpa が一例あるに過ぎない。堀内上掲書 §. 1680 (caitya), §. 1962 (stūpa) を参照。
- (68) 杉本上掲書 pp. 47-49。
- (69) チャイティヤについては杉本上掲書 pp. 84-141 に詳しい。  
また羽田野伯猷「菩薩と如来供養 (tathāgata-pūjā) と世工業処 (śilpa-karma-sthāna)」(『チベット・インド学集成』第4巻、法蔵館、昭63、pp. 122-136) を参照。
- (70) 堀内上掲書 §. 4。
- (71) 堀内上掲書 §§. 32, 166, 169, 172, 175, 182, 185, 188, 192 etc.。
- (72) 『真実撰経』所説の金剛界曼荼羅は、須弥山頂の金剛摩尼宝峯楼阁で展開された曼荼羅を基本にしている。地上に画かれた曼荼羅は「金剛界の如し (vajradhātupratikāśam)」(堀内上掲書 §. 203 etc.) とあるようにその写しで、法性は同じである点で同質のものと思ないうる。  
また曼荼羅の内宮の形を示す「輪の如し (cakrapratikāśam)」(堀内上掲書 §. 204-7) は、菩提心を表わす月輪とともに、インドのストウーパにおける円形プランの影響があったと考えられる。cf. 梅尾祥雲著『曼荼羅の研究』p. 30。
- (73) 堀内上掲書 §. 587。
- (74) 『密教大辞典』(法蔵館)の同項目参照。
- (75) 平川上掲書 p. 555、  
高崎直道著『如来蔵思想の研究』(春秋社) pp. 150-51。
- (76) 如来蔵の二義性については、高崎上掲書 pp. 761-62 を参照。
- (77) 拙稿「初会金剛頂経の菩薩観について」(『日仏年報』51, pp. 271-290)。
- (78) この箇所は加藤純章「六大と六界」(『密教学研究』12, pp. 155-74) による。また高崎上掲書 p. 758以下を参照。
- (79) 堀内上掲書 §. 26。
- (80) 拙稿上掲論文。
- (81) 堀内上掲本 §§. 7-17。
- (82) 註(72)を参照。

本稿の掲載図(直接典拠および所蔵)

1. ソーマプラ寺の中央高塔の東面(密教文化研究所)



2. ソーマプラ寺のプラン (Directorate of Archaeology and Museum ed., *An Album of Archaeological Relics in Bangladesh, Dhaka*, 1984)
3. サルバンヴィハーラ中央主堂の北面 (密教文化研究所)
4. サルバンヴィハーラのプラン (Directorate of Archaeology and Museum ed., *op. cit.*,)
5. ルプバンムラの塔の南西面 (密教文化研究所)
6. イタコラムラの祠堂の東正面 (密教文化研究所)
7. イタコラムラの祠堂の西裏側の塔跡 (密教文化研究所)
8. ヴェスヴィハーラの塔跡 (密教文化研究所)
9. シタコット寺のプラン (Directorate of Archaeology and Museum ed., *Ibid*)
10. コティラムラの三宝塔 (密教文化研究所)
11. コティラムラのプラン (村主恵快「東パキスタンの仏教遺跡」『仏教芸術』65、昭42)
12. シャー・ジー・キー・デリーの大塔プラン (山本智教著『インド美術史大観』毎日新聞社、平2)
13. ラワクの仏塔プラン (宮治昭「西域の仏教美術」『講座仏教の受容と変容 4<中国編>』佼成出版社、平3)
14. ボードガヤーの大塔 (村田次郎「インドの建築」『世界美術全集11<インド・東南アジア>』平凡社、昭28)
15. ナーランダ寺の主塔
16. クムラハール出土の奉献板 (宮治昭著『インド美術史』吉川弘文館、昭56)
17. ジェワリー出土のミニチュア (Debala Mitra, *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971)
18. 阿弥陀如来像の上部 (密教文化研究所)
19. サーンチーの遺跡図 (宮治上掲書)
20. サーンチーの復元図 (奈良康明著『仏教史I<世界宗教史叢書7>』山川出版社、1979)
21. ボロブドゥールのプラン (千原大五郎著『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会 平57、p.136)
22. チャンディ・セウのプラン (佐和隆研『インドネシアの遺蹟と美術』日本放送協会、昭48)
23. チャンディ・セウの主堂プラン (同上)
24. チャンディ・セウの小祠堂内の宝生仏像
25. アーナンダ寺のプラン (千原上掲書)
26. インダス文明の幾何学文様のある印章 (宮治上掲書)
27. 古代貨幣のモチーフ (山本上掲書)
28. 金剛界曼荼羅のプラン
29. 金剛界九会曼荼羅の三昧耶会 (大正図像)
30. 五部心観の金剛界自在女 (梅尾祥雲著『金剛頂経の研究<梅尾祥雲全集別巻II>』臨川書店)
31. ナーランダ寺の奉献塔 (Mireille Bénisti, *Contribution À l'Étude du Stūpa Buddhique Indien*, Tome II)

キーワード <バングラデシュ、仏教遺跡、仏塔、ソーマプラ寺、金剛頂経>